

GR
白雲峯

とりぬ



35

昭和50年10月1日

宗教法人

鳥居観音

表紙の説明

秋の白雲山

境内 200,000平方米、裏表紙の内側に図示あり。

紅葉の期間 10月下旬より12月上旬まで

入山時間 毎日、9時—17時まで

(自動車登山道・遊歩道、有り)

自然の中に生々と各種樹種草木無数、健康と憩いの場をもっています。

目次

一、	鳥居観音だより	十三
一、	諸寄進の御願い	十三
一、	田舎医者	九
一、	西遊記	五
一、	観音経 (光山善雄)	三
一、	道光禅師 (故高階瓏仙貌下)御法話・其の二六	一



道光禪師
(故高階龍仙祝下)
御法話

物、心、学問

仏教は真理を説き教えるところの、即ち、浄化指導でありますから、広く世界を浄化することに意を注がねばなりません。そのためには、世界を形成している人間を浄化することであり、それには第一に人の心を浄化することであり、そこで人間が向上するには、先ず精神浄化からしなければなりません。そこに指導原理があるのであります。宗教は人間の持たなければならぬ、いの一の問題であると思直して欲しいものであります。

しかるに日本の現状は、物心両面のうちで常に科学科学といつて、多く物質にぞくする方に偏重して、心の方面をおき忘れたあり方であり、こと

に若い世代の人に、精神面の課題を無視する人が多くなって、それがために暴力や、不良行為が青少年達に多くなつてきていると思ひます。これでは次の国家の世代が心配されてなりません。

私が先日ある人を訪問しますと、親しい間柄なので、すぐ書齋に通されました。その書齋の色紙がけに、つぎのような教訓を書いた色紙が入れてありました。みじかい文であるから読んでみますと、

「人は少なくとも、一生一度は生命を投げ出すか、あるいは財産を投げ出して、かからなければならぬ大問題につきあたることがある。その時に決心してのぞまなければ成功は望み得ない。そのためには平素より善根の行為を積み、神仏を敬う宗教の信仰をしておらねばならぬ。それは自分の力のみでは、とうていだめである。」

とありました。若い世代の人でも、心ある人ならば、ここに気づくと思ひます。

すなわち、この陰徳行為と宗教心とを心がけておけよということでもあります。

要するに人間は魂がもとであります。その魂を養成するのは、この意味の道徳と宗教であります。そうしてそれを助勢するために、いろいろの学問が必要であることを申し添えておきたいのであります。

簡易生活と儉

この世の中にあるものは、如何なるものでもそれぞれに真理をふくんで存在するものです。一粒の米でも、一つの石でも、一片の紙切れでも、みなこれ生命の現われであると心得て、決して粗略にしてはなりません。報恩報徳の觀念に住して、取扱つていくようにしなければなりません。古語に「茶裡飯裡、別所に向わず」ともあつて、仏法の眼から見ると、喫茶も喫飯も、行往坐臥も、柳の緑も、花の紅も、みな仏法の現われであります。ですからまた仏法は、露柱灯籠であるとも、牆壁瓦礫みな仏事をなす、とも申してあります。故に一微塵にも、仏の生命がこもつており、仏光明の現成であるとして知れば、たとえ繩きれ一本でも、ちり紙一枚でも、決して

て粗末にすることはできません。報恩感謝の念をもつて、大切にとりあつかつていかねばなりません。この感謝の心が実生活に現われて、やがて日用が仏法になるのであります。

仏教では四恩を説きますが、帰するところは、感謝報恩の生活を説示したものであります。四恩とは父母の恩、国王の恩、衆生の恩、三宝の恩で、この四恩に深く徹すれば、一茎の野菜でも、一滴の水でも、決して粗末にはできないのであります。

瀧山の靈祐禪師は「この一粒の米を軽んずることなかれ、百千万粒もことごとくこの一粒より生ず」と仰せられた。又道元禪師様は杓ひしやくに半杓の水を残して愛惜されたといふことは、有名な訓話となつていますが、彼の永平寺の山の中では、昼夜不足なく水は流れている。それでいて三杯の水を使うところは、二杯半にして、あとの半杓はもとの流れにおもどしになつた。

(以下次号)

「観音経」

光山 善雄

観音経についてお話いたします。観音経は普門品とも申し、本当の題は妙法蓮華経観世音菩薩普門品です。今ではこの経は妙法蓮華経から独立した姿になっていきます。

宗教は人間の心の問題であります。世の中が変り生活が向上しても、生老病死のある以上、宗教はなくならない。電灯やラジオのない山奥にも寺院、教会があるのを見ても、人間生活に根強く結びついているのがわかる。

アジアには仏教や道経、神道等二重信仰もありませんが、五億五千二百万人。カトリックが北米、南米ヨーロッパを入れて五億三千七百万人、回教がアフリカ、アジアを入れて四億三千万人、印度教が三億三千二百万人、新教プロテスタントが二億千四百万人、ギリシャ正教一億三千七百万人、原始宗教がアジア、アフリカを入れて一億二千万人、ユダヤ教

が千二百万人と朝日新聞の宗教分布図で示されたことがあります。

このように宗教の分布を見てもアジアの仏教は観音の信仰が多くをしめています。子供まで、観音さまの名前を知らない者はなく、どこの国民にも親しまれ信仰されています。

まず観音経を説くにあたり、観音さまを信ずることが大切です。観音さまとは如何なる仏か、大慈大悲の仏さまで、正法明如来が衆生を助けんがために菩薩となって世間の苦悩の音声を観じて抜苦与樂と申して苦を抜き樂を与え給うのです。観音さまはどこにいらっしゃるか、と云うと、宇宙に充滿しております。一切の人類はおかげをこうむらないものはないのです。「十方の国土に刹として身を現せざることなし」と普門品にもあります。また「よく世間の苦を救う」とありまして、世間の苦悩を除いて下さるのが観音さまでありますから、朝夕に観音経を口で読み、心で読むことです。お慈悲を身で実践することが身体でお経を読んだことになるのです。

また心で味えばよるこびがわきます。

「観音菩薩の名号」が主体であり、生命であり、光明でありましょう。

一心に称名するほかに観音経はありません。

観音さまを信じ御名を称うることにより、

「われ観音の分身なり」と、観音さまと一体の自覚が湧き出しましょう。

わが国の観音信仰の歴史を探究しますと、堆古朝のとき、聖徳太子が厚く観音さまを信仰し、自ら観音の分身として十七条の憲法を制定になりました。

また親鸞聖人は太子和贊を作って太子を奉讃されています。

「救世観音大菩薩、聖徳皇と示現して

多多（ちち）の如くすてずして

阿摩（はは）の如くにそひたもふ。」

「無始よりこの方この世まで

聖徳皇のあはれみに

多多の如くにそひたまひ、

阿摩の如くにおはします。」

「聖徳皇のあはれみて、」

仏智不思議の誓願に

すすめいれしめたまひてぞ

住正定聚の身となれる。

「大悲救世聖徳皇

父の如くにおはします。

大悲救世観世音

母の如くにおはします。」

「和跏の教主聖徳皇

広大恩徳謝しがたし

一心に帰命したてまつり

奉讃不退ならしめよ。」

聖徳太子が日本文化の父として、日本の進むべき道標を示された設計書が十七条の憲法であります。

奈良朝時代にあつて、聖武天皇の御代に光明皇后が厚く観音さまを信仰されて、その慈悲が実践布施の行となつて、庶民の浴場を開設し国民の友となり、身も心も洗滌されました。まさに偉大なものでした。

（以下次号）



西遊記

(其の三〇)

岡部千三

仙術くらへ(前号より)

「いくら悟の空きようだいがつよくても、もうだめだ、なむあみだぶつ、……。」

八戒は、お経をとなえはじめた。

いちばん平気なのは、悟空である。あたまがもとへもどらないとわかると、

「あたまよ、でろ。」と云うと、どうであるう、首の切り口から、あたらしいあたまが、にゆうつとつきでて、ぐんぐんのび、あれ、あれと云うまに、もとの悟空になっていた。

「へへへへ、みなさん、こんにちは、」と云って、悟空は、にやにやと笑っていた。

首切り役人をはじめ、虎力、鹿力、羊力の三人たちは、あっとおどろいているばかり、

「なお、悟空、だいじょうぶだったか……。さぞかし、いたかったであろうな。」と三蔵法師が云った。

「なんの、いたいことがあるのですか、気もちがいいくらいです。なんでもあたらしいものはいいですね、ところで、こんどはそちらの番だ。」

あごをしゃくって、仙人たちの方をさした。

「いや、もうよい。法師にも、でしたちにも、つみはないとわかった。自由に、ここをでていってもよろしい。」と国王は、仙人たちをかばって云った。

「いや、よくはありません。もともと、わたくしたちに、つみはなかつたので、ゆるされるのはあたりまえです。わたしの首を切った刀で、こんどは、仙人たちを切っていただきましょう。」

悟空は、つよくいい張った。

「おお、いいとも、切ってもらおう。」

さすがは虎力仙人、にげかくれはしません。しずかにすわって目をとじた。

「えいっ。」

首切り役人の刀が、きらりと光ると、虎力仙人の

首が、ころりとおちて、ころころころ、

「あたまよ、こい。」

仙人は、悟空とおなじようなことをとなえた。そのとき、悟空は、一本の毛をぬいて、赤犬にかえた。犬は、虎力仙人の首をくわえて、さっとかけ出した。これで虎力仙人の術はやぶれてしまった。虎力仙人の体は、そのままどさりとたおれ、一匹のところに、かわってしまった。虎力仙人は、とらのぼけものだったのである。

「やあ、悟空は、まほう使いだ。このうえは、腹切りくらべで、力をためそう。」

鹿力仙人が、こうどなりたてた。

「いいとも、腹切りもけっこう。わしの腹には、虫がわいているようで、気もちがわるくてこまっていたところだ、丁度いい。ついでに虫をだしてしまおう。」

悟空は、そう云いながら、腹をつきだした。

そこで、役人が、悟空の腹に、長い刀をつきさした。ところが悟空は笑っていた。

「いたくないよ。かゆくもないよ。ちょっとくすぐったいだけだ。」

つきは、鹿力仙人だ、役人が刀をつきざしたところを見すまして、悟空は、毛をぬいて一羽のたかにした、そしてきず口から、はらわたをさらっていかせた。これで鹿力仙人は、鹿になって死んでしまった。

「あとは、人間のてんぶらか、羊力さんだよ。」と悟空が云うと、

「そちらが、さきにやれ。」と、羊力仙人は、しりごみをした。

国王のけらいたちが、大きななべをはこんできてその中に油をいっぱい入れて、下から、どんどん火をもした。

油はぐらぐらにえ立った。

「ふるが、わいたようだな。では、ひとふるあびよう。さっぱりするからな。」

どぶん、じゃぶりと、悟空は、油の中へとびこんだ。

「いいゆかげんだ。」

なべの中を、ゆっくりおよぐようすは、すこしもあつそうには見えない。そのうちいたはずらをしたくなつたので、一本のくぎになって、なべの底へしずんだぎり、すがたをかくしてしまった。

役人が、のぞいて見て、

「とうとうまいったか。さるは、どうやら、とけてしまったらしいぞ。」

よるこんで、国王知らせた。

「ほかの三人も、なべになげこめ。」

国王は、らんぼうなことを云いだした。

これをきいた八戒は、おこつて、あばれだした。

「そんなばかなことがあるものか、ええ、これというのも、悟空のきょうだいが、ほらをふきすぎたからだ、悟空のばか、ばか悟空。」

くぎになつても、悟空には、なんでも見え、なんでもきこえるので、これをきくと、もとのすがたにもどつて、なべの中に、すつくと立ちあがった。

「八戒、なにをいう、ばかはおまえだ。」

「悟空のゆうれいが」と役人たちはこしをぬかした。



八戒なにを云う
ばかはおまえだ

八戒もこれにはおどろいた。

もつとびっくりしたのは、役人だ。

「国王さま、悟空のゆうれいがあらわれました。」
と、ふるえながら、国王に知らせた。

それと、おおぜいの役人がなべをとりまいたところへとびだした悟空、如意棒をふりあげて、役人たちを、ぐいと、ひとにらみしたので、役人たちは腰をぬかしてしまった。

羊力仙人も、こうなつては、しかたがない、しぶしぶと、着物をぬぎ、そつとなべに手をさしこんでみると、油は氷のようなつめたさだ。

「ありがたい。これなら、へいきなものだ。」

その声が、悟空の耳にはいった。おかしいと思つた悟空が、さつと空へまいあがると、竜王がまごまごしていた。

「なべの中がつめたいと云うのは、あやしいと思つたが、わかつたぞ、おまえが、けらいの冷竜に、なべの底をまもらせてつめたくし、羊力の加勢をしているのだな。」

「ゆるしてください。冷竜がかってにやったことで、わたしはいっこう知りません。」

「よし、それなら、冷竜が相手だ。」

冷竜というのは、水をつめたくする術をつかう竜である。

悟空は風になつて、なべに近づき、冷竜をつかまえてしまった。すると、なべの油は、きゆうにあつくくなり、羊力仙人は、たちまちくるこげになつてしまった。

羊力仙人は、羊のばけもので、死んだすがたは羊だった。

「国王、これでおわかりでしょう。三人は、本当の仙人ではなかつたのです。そしてあなたの国と、王の位をよこどりしようとたくらんだ、ばけものです。気をつけなければいけません。」と、悟空は、国王におしえた。

このうわさは、国じゆうにひるがり、四方から悟空の体の毛をもつた坊さんたちがぞろぞろあつまつてきた。

(以下次号)



田舎医者（其の十五）

見川 鯛山

挿絵 おおば比呂司

大先生（前号より）

「い、いやア、もうそこなんだよ。」

すっかり恐縮して私は云った。

私と高山彦九郎がどっちもえらそうな顔をして入って行くと、当主の三七郎が、その戸口に出迎えていた。

「これは、これは先生がた、おそろいでどうもはや。ことに坂本先生は御遠方からの御越しで、全くもってはや御難儀でした。」

坂本？ まさかあの坂本竜馬ではなかるうが、どっちにせよ、勤王党に関係ありそうな先生だった。

「さ、どうぞこっちへ入ってください。どうぞ、さ

あ」

三七郎は坂本先生ばかりをうやうやしく案内し、さっさと、奥の座しきへ通していった。すると、大先生は応揚にふさふさした、フケだらけの長い髪を撫でつけ、白足袋を引きずってスウッスウッスウッと歩いていった。

土間に取りのこされた私は、いろりに腰を下ろして一服つけることにした。すると、三七郎のおかみさんが炉の火をかきおこし、煙たそうに目をこすりながら云った。

「いつも診てもらっているあんたにア申しわけねえだけんど、年よりがどうしても一度呼んでくれっちゅうもんで、わざわざ福島県の白河から来てもらっただ、あの先生は。」

「ほう、なる程なア、で、あの先生はいったい全

体なんの先生なんだネ？」

奥の方をあごでしゃくって私がかきくと、

「あんた知んねかったかね？……あの先生が有名な祈禱師の坂本竜馬先生だわな」

もちろん私は面白くはない。一人とり残されたいろりの端で、でかい梅干に砂糖をたっぷりくつつけて、私はムシャムシャと食った。

奥の座しきでは、もう祈禱が始まっていた。

「エイッエイッヤーアッ。エイッヤーアッ!!」

とはげしい気合がかかり、どたばた暴れ廻ると、家じゅうがゆれ動き、天井から乾物屋のワカメのような長いすすが何本もおちてきた。

「ヒエー、ヒエー……」

と老人の悲鳴が気合術の合いの手に聞こえた。きつとあの坂本竜馬先生がふけだらけのざん切り髪をふりみだし、たすきがけでおそいかかっているのにちがいないのだ。やがて祈禱が終った。座しきの板戸がスーッと開いて、汗だらけの竜馬先生が肩で息をしながら、まだものにモノにつかれたような顔を

して出てきた。

そして今度は、私の番であった。入って行くと、爺さんはまだ生きていた。だが、もう、殆んど人事不省で、目も開けっぱなしのまま僅かな呼吸をつづけていた。

私は被害者に注射してその呼吸をととのえ、乱れた鼓動をもとへ戻した。

私が出てくると、いろり端はもう酒の席が始まっていた。茶碗でのもんでいた勤王党の坂本竜馬先生はいつの間にかよっぱらって新撰組になり、そして私にどなった。

「おい、ヤブ!! 元氣を出せ、医者だって治せる病氣もあるんだ。心配しねえでまあ、こっちへきていっぺえのめ!!」

残 暑

秋が、そっそくとびにやってきた。

遊びつかれた別荘人種が、色とりどりの自家用車にのって、はなやかな都会へ帰っていった。

そこここに捨てられた、缶詰の空カンや紙屑が、秋の陽ざしに色あせてゆく。

きまって、台風が通る。

はげしい雨風が、みだらな夏の汚物を吹き散らし洗い流す。

そして、すぎとおった秋晴がつづく、別荘地帯をぬけるとぼっと明るい開拓地へ出た。枯れた唐もろこし畑の、狭い小路に、わずかばかりの残暑があった。

そのつき当たりに、父ちゃんの小屋がある。杉皮葺の屋根に石ころをのせて、小さく貧しいのだ。

板戸を開けると、いい匂いがした。

「おお、うまそうだな。」と私がいうと。

「ジャガイモにてるだ、あとでごつつォすつべ。」と母ちゃんが、土間の七輪にかがみこんで、鍋のふたを取ってみせた。

「父ちゃん、たんと悪いのか?」

「なあに。たいしたことねえだ。あいつ横着してるだ、ふてねだわな。」とわざわざ声が大いなのであ

る。

「ふてね?」

「ンだわな、俺に叱られると、すぐ病気になるだ。心臓がくるしいだよ。あのずう体でな。」

すると、障子の向こうで、父ちゃんが咳こんだ。

「ほれ、また始めた。いつでもあれだ。先生だまされんなよ。」と、母ちゃんが云う。

「ああ、そうする。でもどうしてまた。父ちゃんはしかられるんだね?」

「それがなァ。五十のくせに、まるで餓鬼みてえなんだ。ちよつとばかし銭がはいったもんで、もの買ったがる。」

「銭がはいつちァ、うまいな。」

「なァに、ほんのちよつとばかしだ。」

「父ちゃん、何を買ったがるのかね。まんじゅうでも欲しいってのか?」

「テレビだとき、あんなもの……」

母ちゃんがにくらしげに、ジャガイモに箸をつき刺した。

「テレビ、そんな大金がはいったのか。」

「なあに、ちょっとばかした」

「でも、一万や二万じゃ買えない」

私云うと、障子の穴からこっちをのぞいて、父ちゃんが答えた。

「銭は、いま、うんとあるだ、五十万だ。」

「五十万！」

「うそだ。そんなにねえだ、ちょっとばかした。」

母ちゃんが口をはさんだが、父ちゃんが続けていった。

「共有地がうれただ、別荘の分譲地になるのだとヨ。おれとこ、百万近くはいっただが、半分は借金を返した。だから五十万あるだ。」

「？」私が母ちゃんの方を見たら、彼女は箸に刺したジャガ芋をかじって、堅さをためしている。とほけた顔だ。

父ちゃんが、とうとうはい出してきた。

「おれたちァ大金持だ。この間まで、生活保護をうけてたのにな、わかんねえもんだわな。」

「わかんないもんだなァ」私がい槌をうつと、父ちゃんもつとでかい話をした。

「先生、それっぽっちじゃねえだぞ、おれの土地別荘さ続いでるべ、だから土地会社が坪二千円で売れって云うだ。」

母ちゃんがこわい目で、彼をにらんだが……

「おらァとこ、県からだみてえに、安く払い下げてもらつただ。それが五町歩の余もあるだ。坪二千円だからなんぼになる。何億だべ？」

「何億？」私はめまいがしたので、腰をかけさせてもらった。

「そうなるだべ？ 計算すればわかるだ」

「何億にねえ……」

「そうだと、五町歩は一万五千坪だ、だから、それに二千円をかければいいだ。」

父ちゃんが私に賛成を求めるのだ。

「そうだと、そりゃ、買った方が……」

突然、母ちゃんが、棒に刺したジャガ芋を凶器のように突き出して、
(以下次号)

諸寄進諸奉安のおねがい

○壱万體観音奉安のおねがい

(現在八、四五一体)

壱体 A金壱万円 先祖代々永代供養勤修

B金七千円

壱体につきご仏檀奉安の小観音(開祖桐江先生作)を謹呈します。

○壱万巻写経のおねがい

(現在七、四二五巻)

壱巻 金壱千円 お一人で何巻でも結構です。

般若心経の折本で写せます。ご先祖供養のため

○地球愛護平和観音建設費の勧進

今世界人類の平和こそ誰もがねがってやまない時です。地球愛護、人類平和への大精神により衆生済度されるよう大願がこめられて、四月十七日春季大祭に開眼されました。多少にかかわらずご協力いただければ、平和観音の建立の意義が一そう深まることと存じます。何卒よろしくおねがいたします。

鳥居観音だより

終了した行事

四月十七日、春季例大祭、午前十時、多数のご参列を得た中に於て、小林、有馬、鯨井三老師によつて挙行されました。

続いて、午前十一時、地球愛護平和観音、開眼式を白雲山中腹のあずまやの、広場に於て挙行しました。

総高十五米の平和観音に対して最もよい場所を選んで式場といたしました。

開祖平沼先生が地球愛護の大精神をすべての人の心と呼びかけようと、白雲山の見晴台に建立されたのであります。

地球儀(直径五、五米)に立った平和観音(三、五米)が両手に持ったつぼから霊水を地球に注いでいられる姿は、まさに現代の世相に思いをいたし、

誰もがこの悲願に対して等しく心をうたれました。

本年は当山にとりまして、開山三十五周年を迎えた記念すべき年でもありまして、地球愛護平和観音が建立されたことも、一そう意義深く存じます。

折から全山花の真盛りの中に多くの参拝者各位をお迎えして、この盛儀が挙行されましたことは、当山の史上に又一頁を加えることになりました。

尚本日から当山つつじ祭りも開始いたしました。全山みつばつつじの花を中心に種々の春の花を探勝していただきました。

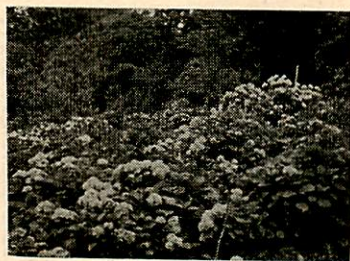
特に土曜、日曜には年と共に参拝をかねての行楽のお客様も増加して参りました。

五月十七日、玄奘三蔵塔、救世大観音の春季例大祭を午前十一時より挙行、両祭場にて参列者のご焼香参拝をいただき、内部の見学をしていただき、又山内の初夏の花と青葉の香りを探勝していただきました。

五月二十日つつじ祭り終了。四月初旬から当山の一番すばらしいみつばつつじから紅つつじの祭りも

本日終了いたしました。

それから、藤の花からあじさいの花へと、咲き次いで、季節の花の美がながめられました。



本年のあじさいの花はたくさんのお花をもちまして、その種類も数種類ありますのでそのうつくしさは格別でした。

当山に寄せられた手紙と感想文

鳥居観音に感激して

A 生

拜啓初夏の候、益益ご健勝のこととおよろこび申し上げます。

過日は当所の教化行事として実施しました。上級者の集団散歩に際しましては、矯正教育に深いご理解をよせられ、ご多忙中にもかかわらずご案内、その他種々ご配慮をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげをもちまして、少年達一同、親を想う観音像の由来に深い感銘を覚えるとともにあざやかな新緑を存分に満喫して、有意義なそしてたのしい一日を過ごすことができました。少年達から当日の感想文の提出がありましたので、拙ない文でありますが一覧下さい。

今後共収容者の矯正教化にご協力下さいますようお願い申し上げます。

昭和五十年六月七日

川越少年刑務所長

若林 栄 一

白雲山の遊歩道を約一時間歩いて、感じたことは東京近辺の地点にある、白雲山及びまわりの山々にこのようなうつくしい樹木や、植物群がまだ数多くあることを、この目で見ても、ほんと安心した次第です。現代社会は、公害、公害とさわいでいる割には自然保護はほとんどなされていない現状ですが、ここ宗教法人、白雲山鳥居観音は、全山を信仰の場として、観音信仰の人々に、又無感心の人々にも、観音様は暖かい光と手をさしのべていられると思いました。

と云うのも、白雲山の自然破かいを、最小におさえようと工夫されているのを、見てもわかりました。

人間の生活にとって、自然はなくてはならない大切なものであり、地上に生きるものすべてが、共存していられてこそはじめて、人間らしく生きられるのだと、信ずることができるのです。

鳥居観音のように、全山の自然をそのまま保存しその中にいろいろの堂塔を建て、特に新しく出来上った、地球愛護、平和観音は現代社会に呼びかけられた観音である、と思うと、私達人間が忘れかけている、最も大切なものを教えてくださっているように感じました。

最後にご案内下さった、岡部先生に心から感謝申し上げます。

始めての一級生集団散歩に B 生

鳥居観音、これは始めてきく名でした。

今まで一度も、宗教について、考えたこともなく自分の家の近くにある、善光寺さえ一度も行ったことがありませんでしたが、今度始めて、鳥居観音に参って、その中にある仏像を見て、その美しさに深く感ずるものがありました。

又日本に玄奘三蔵法師の靈骨をまつた塔と、法師の銅像が建てられているのにおどろきました。

僕は西遊記も小さい時、よんだことがありますの

で、なつかしくなりました。

白雲山中の地球愛護、平和観音に見られる尊大な、人類愛に、私達は心をうたれました。

この白雲山鳥居観音は、開山三十五周年を迎えられたことですが、すばらしい自然と、美しい観音さまをいつまでも、いつまでも、今日見られるような、姿でおいていただきたいものです。

三蔵塔の美しくさが、あたりの樹木に相和して又格別なながめでした。

空高く建った、救世大観音を見上げていると、何か心がきれいになってくるのを感じました。

何時の日か、又ゆつくりと参拝することができますようお願いしました。

この感激をいつまでも、心にとどめて……、観音さまを、時々、思い出して、目をとじてまふたのうらにかべたいものです。

ありがとうございます。

C 生

過日は、白雲山鳥居観音の参詣にあたりましては懇切なご案内をいただき誠にありがとうございます。

私にとりましては久しぶりの野外の散歩でした。まっすぐに伸び上がった杉、新緑の木々、鳥の鳴声あげは蝶の舞う姿等、故郷をなつかしく思い出させてくれるものでした。

また、そうした自然の中に建立された、庫裡、本堂、鳥居文庫、仁王門、大黒殿、平和観音、三蔵塔救世大観音、写経塔、玉華門等インド—中国—朝鮮半島—日本というように伝わり、飛鳥—白鳳—天平と創造的に開花してきた。仏教文化の歴史を垣間見る思いがいたしました。

所謂戦後世代と呼ばれる私には、篤い信仰心もなければ、観音信仰そのものの理解もさしてないのですが、古代の建造物から、このように現代的に新しい感覚をもって建立されたことにつきましては、今

荒唐の瀕に苦悩する人間の祈念の復話でもあらうと心を打たれました。この「祈念の復話」が現実生活の中に暗示されているかのように思えてなりません。山内を歩きながら、いろいろのことを感じ考えながら、これからの生活の中で大切に行きたいと思いました。

楽しくそして意義深い一日をすごせましたことは偏に懇切なご案内と皆様方のお心こもった温いおもてなしのおかげと、重ねて心から感謝を申し上げます。

白雲山に詣でて

D 生

岡部先生、先日はお忙しい中、私達のために山内をご案内下さいまして、本当にありがとうございます。

私達六名は、皆、なんらかの良い思い出を残したと思います。

私達は、更生を願って下さっている、先生のご好意を無駄にしないように、これからの毎日を無事に

過して、自分の人生を大切に、生きて行きたい
と思います。

人の好意と云うものは、大小とわず嬉しいもので
す。特に施設生活をしている私達にとって、集団散
歩ができ、他の収容者と違った経験ができることは
非常に嬉しいことです。

それにもまして、先生方のご好意が身にしみるよ
うです。そして、先生方に、ご好意をうけるだけ
何も返すことができない自分が、何か淋しい気がし
ます。

もし、先生が、川越においでの際にありました
ら、是非施設におより下さい。

その時は、私達は、お互いに所内生活とかその他
の話題をもって、先生とお話し合いができると思
います。

これからも、色々のご多忙の先生だと思えますが
お体に充分気をつけて下さい。

そして、私達六名は、白雲山鳥居観音の、益々ご
発展と、先生のご健康をおいのり申し上げます。

白雲山 鳥居観音 救世大観音(原型大)が

津軽(青森)の賽の河原に開眼さる

七月三十日午後二時、青森県、金木町、賽の河原
に、当山、開祖平沼先生作による救世大観音(中央)
の原型が導入され、建立開眼法要が執行されました



平沼桐江先生作(立座二米観音四米)

このことは、まさに仏縁と云うより外、何ものもありません。と云うのはこれより先、昭和四十五年秋のある日の夕方、当山に詣でた人がありました。

夕方のこと故、その人は急ぎ足で白雲山へ登って行きました。

丁度三蔵塔の下の道まで来て、やれやれと、はるか前方を仰ぐと、救世大観音が建立施工中で、足場やかけ橋があつて、その間から大きい白い観音像とお顔が見られました。

その時の感動が今まで見て廻った観音様とは別なもので、心から求めていた観音様だったので、だそうです。

その人とは!! 工藤儀一郎氏で、津軽霊場建設促進期成会理事長なのであります。

工藤氏は故郷の賽の河原へ、この観音を何としても導入すべく、製作者平沼桐江先生のおゆるしを懇願されたのですが、原型は彫刻家の魂であり、本当に津軽に建立可能かどうかご心配もありましたが、工藤氏の身心共に打ち込んでおられるこの浄業に對

しまして原型導入のお許しがでたのです。

本州のさい果ての地、金木町の慈覚大師、開山と伝えられる。賽の河原地蔵尊は、毎年旧暦六月二十三日四日の供養会には地藏堂が開かれ奉納されたお地藏さんの供養が夜通して行われます。

いく年か後、原型大の救世観音が、関係者の厚い協力で、数倍の大観音に改建され、当山の分院として発展されることを祈ります。

八月十六日 流灯法要 午後四時半

恒例によつて、流灯法要(本堂)に於て、千数百の供養灯ろうを飾つて、小林、有馬、鯨井の三老師によつて挙行しました。

開祖平沼先生ご夫妻は前日から来山されて、白雲山の施設や夏の風物を満喫されました。

五号台風が四国南方に接近しつつあると云う天気予報を気づかいながら、法要の準備を進めました。

残暑は例年と変りなく、熱気は庫裡にも流れておりますが、瑞穂町からの一行に続いて、第二陣、第三陣がおつきになりました。

本堂には供養される灯ろうが、千数百個きれいに
かざられて、法要をまつばかりです。

庫裡の広間は来山の方で一杯でした。

年に一度の団体参拝なので、どなた様もたのしそ
うに語り、笑い、よく召し上り、和気あいあいの様
子でした。

午後三時頃には川越の新友講の御一行もバスでお
つきになりました。

時折にわか雨がやってきて今晚の流灯はどうかと
心配させました。

法要は午後五時の予定でしたが、天気も気づかわ
れたので、三十分くり上げて開始しました。

午後六時三十分より名栗川へ運んだ灯ろうの流灯
を始めましたが、折から小雨が降り始めたので、気
が気ではありません。河原に張ったテントの中から
灯の入った灯ろうが次々とリレー式に川にかけた、
板の橋の上から流されると、一つ一つがゆらり、ゆ
らりとゆれながら、灯かげを川面に映して実にきれ
いでした。老僧の読経の声が川原の闇に流れると、

その声に和して次々と流れてゆきました。

流灯が終る頃、河原に用意された花火の打ち上げ
が開始され、中でも仕かけ花火と早打ちは山峡をい
るどる一瞬の花が人の目をうばいました。

花火のいるどりもさることながら、本堂入口の広
場には、盆踊りのやぐらが組まれて、それを囲んで
大きな輪をなして、流すレコードに合わせての踊り
の風景は、夏の夜のたのしい思い出となりました。

センターにお泊りのお客さまも浴衣姿で、手ぶり
足ぶりも、いかにもたのしそうに踊られました。

迎える行事

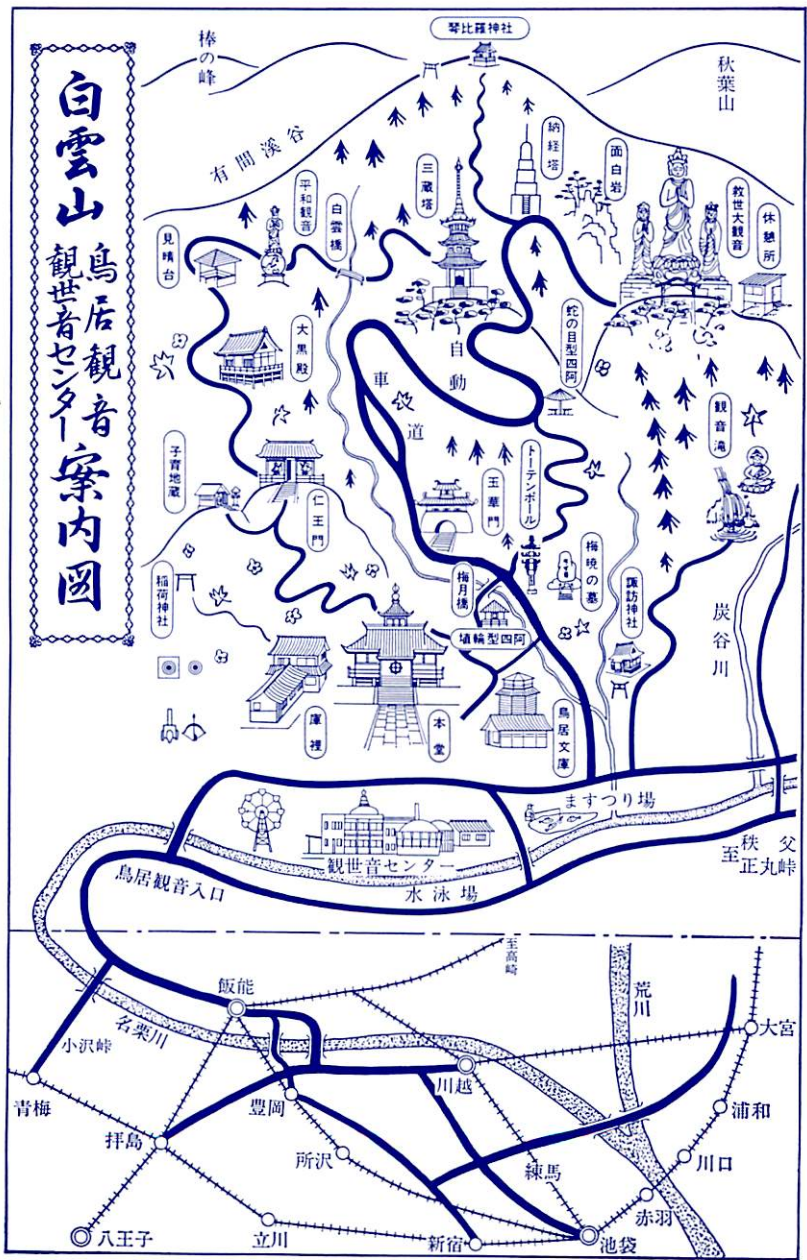
十一月一日より紅葉狩 十一月末日まで

十一月十七日 秋季例法要

とりひ	第三十四号	発行日	昭和五十年十月一日
編集兼	埼玉県入間郡名栗村	鳥居観音	岡部 千三
発行人	浦和市仲町二一八―十五	武州印刷株式会社	
印刷所	鳥居観音	電話	〇四二九七(九) 〇四一七番

白雲山

鳥居観音
観世音センター案内図



秋の行事のお知らせ

○紅葉まつり 11月1日～11月30日

年々紅葉がきれいになりました。

ご来山の節は倉裡でおやすみください。

おいしいお茶をさし上げます。

○秋季例大祭 11月17日

1. 本堂法要 10時30分

1. 玄奘三蔵塔法要 11時20分

1. 救世大観音 } 法要 11時40分
1. 地球愛護平和観音 }

紅葉が見頃と思われるので、この機会にご利用下さい。

元旦祈祷のお知らせ

○昭和51年1月1日 午前10時

1. 祈 祷 料 1,000円、2,000円、3,000円以上

1. 願 旨 家内安全、交通安全、商売繁昌其他

1. 御申込み期間 50年12月25日まで

1. 御申込み所 埼玉県入間郡名栗村
白雲山鳥居観音御中

1. 料金払込先 埼玉銀行名栗支店、当山祈祷口座
又は直接当山事務所へ。